

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひ致します。

正信偈講座もだいぶ進んで参りまして、今日は「正信偈」の中の天親菩薩のところですね。テキストでは十五頁ですね。前からの流れもありますので、十五頁全部をご一緒に拝読をさせていただきたいと思ひます。どうぞ遠慮なさらしないで、声をお出してください。

天親菩薩造論説 帰命無碍光如来

天親菩薩は、『浄土論』を著わされてみ仏の心をつぶさに説かれました。

「私は碍（さまた）げなき光の如来に帰命します」と表明され、

依修多羅頭真実 光闡横超大誓願

釈尊の教えに依って真実の帰依処を顕し、人みなが迷いの生活からただちに目覚めに至る、大いなる誓願を明らかに説きあらわされました。

広由本願力廻向 為度群生彰一心

み仏の本願の力を広く人々の上に表して、生き悩む人々を救い遂げるため、本願に頷（うなず）く一心をあきらかにされました。

どうも有難うございました。こうして今年も正信偈講座にお参りさせていただくことを、大変有難く感謝申し上げる次第であります。初めにいつものように恐縮ですが、年頭に当たって感じましたことをお話させていただきまして、その後、「正信偈」を学ばせていただきたいと思ひます。

新年を迎えて私が一番感じましたのは、今年も新年を迎えることができたということであり、かなりの歳になりましたので、いつ倒れても不思議ではない、そういう歳になったということがあります。新年を迎えられるということは大変有難いことであるなど感じます。

命あり これ不可思議の事実なり

これは私の実感そのものであります。この命をいただいて、丁寧に言えば、命生かされてありという。それは私自身にいただいておる命であります、同時に生きとし生きるものの命ありという。お念仏の教えに遇うと、世界が開かれておるということ、私だけで生きているわけではありませぬので、生きとし生けるものに生かされて命ありという。そこに、これ不可思議の事実なり。不可思議ということは、人間の思い、分別の計らいなき、大いなる事実であるということでありまして、そこに厳粛なる事実。よくぞよくぞ生かされて命あるという、そういう厳粛なるということと、それから尊厳。まことに尊いという。なにものにも変えることのできない尊さ。そういうことが、命あり、これ不可思議の事実なりと。

それはもうずっとそうであったのだけれども、気が付くということがなければ、そういうことに頷けないということがあります。人間はその点、聞けばすぐわかるという、頭での理解ということが成り立ったとしても、身心、身と心をあげて頷くということになると、そう容易いことではない

ということを教えられます。そういう点、当たり前のこととして生きてきたことの中に、すでに不可思議の事実があったのであるという。これはもう一寸の隙間もないほどはっきりとした事実であります。

一つの例を申しますならば、同年齢の友だちであっても、娑婆の縁が尽きた人、命を果たし遂げていかれたという方が、段々増えてまいりまして、寂しくなるということがあるわけであります。それは自分自身が生かされてあることの、不可思議の事実に出遇うという大事なご縁だと思うのです。そのことを思いますときに、私はやはり、伝承、伝統の恩徳ですね。仏法というものは、浄土真宗のおみのりが相続されてきたと。どこまで相続されてきたか。この私にまで相続されていると。そこが大事な点ですね。客観的な事実としてあるということだけでは、強い言葉でいうならば、話にならないと。私自身がその流れを受けておる身であるという、そういうことですね。

皆さん方もご覧になったかもわかりませんが、レスリングで大きな仕事をされた吉田さん。引退されましたけれども。会見を私も見たのですが。吉田さんの言葉の中に、「私がこのようにして今日まであるのは、よき先生、よき先輩方の教え、導き、支えがあってあるのであります」という言葉がありました。それは大変素晴らしい言葉であると思います。吉田さん自身の本当に大きな努力、画期的な才能ということもあるでしょうが、自分を誇るのではなくして、自分を支えてくださった、生み出してくださった、そういう伝統、伝承を尊ばれまして。

そしてですね、ある報道関係の記者の方が、「今までの大きな名誉ある業績の中で、一番吉田さんが印象に残っていることはなんですか？」と聞かれましてね、すぐ答えられないでね、しばらく考えておられまして。オリンピックの大会で、四連覇がかかったときですかね、リオの選手でしたか。「負けたとき。銀メダルになったとき。その時が一番印象に残っている。負けた人の気持ちがわかるようになりました。これが私にとっての大事なことでありました」ということをね、非常に爽やかな明るい表情で言われました。

四連覇がかかった時に、負けた時はね、こんな泣き方をするのかという程、号泣をしておられて。身も世もあらずというような悲しみだったのですが、それが時を経て、本当に大事なことであったと。負けた人の悲しみを、自分自身が負けることにおいて、初めてわかったという。そこに人間としての普遍的な、平等の視点。勝者だけの世界ではなくして、いや、敗者も勝者も平等に一人の人間として、悲しみ喜びを味わっていくという。

伝統、伝承ということは、仏法において非常に大変なこととして、これなくしてはいま私たちが仏法に遇うことはできないということでもあります。仏法の世界においてそういうことが明らかにされるということは、人間の営みにおいて本質的な問題であるということでありまして、伝承、伝統を受けていないものはありません。ご飯を食べるときに箸の握り方一つにしてもね、両親、あるいは先立って行った人たちの日常生活に染み通ったものを受け継いでおるのでありまして、それは現在生きておる私たち自身の生活、人間としての姿を明らかに知っていく大事なご縁、手掛かりであります。

年頭にあってそういうことを教えられまして、そういう伝統をいただいたということは、そういう伝統の中にこの身が生まれ、そしてまたそういう伝統の中に命を終わっていくことができる。そこにですね、生死を、別の言葉で言えば命の歩みですね。計り知れない歩み。そこに生死を尽くしていくことができる。生きるだけではなくして、命終わっていくことができる。気付いてみれば、沢山の方々が千載一遇の人生をいただかれて生きて、燃焼して命終わっていかれたのであると。そのように自分もまた命を終わっていくことができる、果たし遂げていくことができる。ただ私が思いますのは、果たし遂げるということが非常に厳しいと。果遂する。これは清沢満之先生の言葉の中に、

天与の分を守りて、我が能を尽すべし

天与の分というのは大自然の大いなる、仏天とも申しますね。如来様から与えられたその命の分限、分際。これはどうしても分限があるわけですから。それをいただいて、我が能を尽くす。これは他力をいただく心なのです。他力というのは如来の本願力ですが、何もしないということではないのです。如来の他力に遇うならば、力ある限り、存分に生きることができる。そういうことを教えていただいております。人間としては本当に尊い道を教えていただいているのだということ、今年もまた知らされます。こうして皆様方と一緒に学ばせていただくということは、本当に有難いことであると感じておることでもあります。

「正信偈」は大きく前段、後段の二段に分かれておりまして、前段の方は依経段。三部経に依ってですね、阿弥陀の本願を立てられるという。後半は依釈段。七高僧に教えられるという。この依釈段、これは依るという字ですね。龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空という七高僧ですが、インド、中国、日本に生まれられた。時代も社会状況も違う。そういう七人の高僧であります。

その時代社会、国の代表者であって、そこには無数の人々がおられるということですね。七高僧を生み出してきた歩みがあり、それを生きた七人の特に尊い念仏者。大事なことは、七人の高僧の一人ひとりが人間の避けることのできない苦悩、悩みを受けて、それをどうしたら本当に超えていけるか、受け止めて生きていけるか、仏になる道を歩めるか、そういう課題ですね。その課題は七人の高僧方だけの課題ではない。あらゆる人間の根本課題であると。そこが大事なところですね。

あらゆる人間の根本課題であることにおいて、それは私自身の課題であると。昔、若いときですが、標語みたいな言葉の中に、「問題のない人生は寂しい」とありました。問題があればね、早く解けることを願って、事によったら問題から逃げさえします。辛いときはね。そういう生きておる限り、この世に生まれた限り、人間に問題が起こるということが必然しているのであると。

釈尊の四苦八苦はそういうことを語っておるわけですね。「生老病死」という。それから求めていられないという苦しみがありますし、愛情のある方と出会っても、別れなきやならないという、「愛別離苦」。それから恨みを抱く、憎しみを抱く、そういう人と会わなければならない。初めからそうではなくて、初めはどうもどうもと言っている、付き合っていくうちに摩擦が生じてきて、なんでこんなことになったかということが「怨憎会苦」。それから「五蘊盛苦」という色・受・想・行・識。人間の存在を構成している肉体と精神ですね。肉体と精神を持っておる限り、そこから病気になるということも起こりますし、死ぬということも起こるわけですから、苦悩することは必然的なのです。自然なのですね。

人間はあまりにも自我愛、自己愛が強いものだから、私に限ってこんなに悩まなければならないとか、恵まれていないとかというふうに思ってしまう。それは自我、自己中心の考え方によっていると。目を開けば、この世の人々は皆、苦悩を抱いて生きているのであると。私だけが苦しみ悩んでおるのではないと。そこに本当にこの人間が受けた苦しみを受けて、悩まれて、道を見出していた方が釈尊であり、七高僧のお一人お一人であることを教えられますと、仏道ということが、私たちの生活それ自身の中に、日常生活の中に開かれていく。現実の生活を一步も離れなくして仏道が開かれておるということを教えられるのであります。

この七高僧のお一人お一人に聞いていくことができる。特に時代も社会もはるかに隔たった、インドの釈尊に聞き、龍樹に聞き、天親菩薩に聞くということ、なんとスケールが大きいことではありませんか。そういう人の教えに遇うということが小さな閉鎖世界に留まるのではなくして、やはり、真実に遇うということにおいて眼が世界に開かれる。歴史もですね、現実の刹那主義ではな

くして、計り知れない昔から苦悩してその中に道を見出していかれた、念仏していかれたそういう人々の歴史に遇うということがあるのであります。そういう点、私は仏道に遇うということは、大いなる道を開き、慈愛をくださっているのだなと思うのであります。

今日は、

「広由本願力回向 為度群生彰一心」

広く本願力の回向に由って、群生を度せんがために、一心を彰す

(真宗聖典 二〇六頁)

というこの一行二句を中心にと思っております。曾我量深先生という方が「正信偈」についてお話をなされたときに、大変印象に残っておるのであります、

「正信偈」の一句一句が南無阿弥陀仏。念仏であります。

ということをおっしゃられたのですね。「正信偈」はご承知のように漢文の讃歌、歌でありますから、必ずしも易しいとは言えない。易しいどころか難しいと言わなければならないような内容でありますけれども。親鸞聖人が言わんとしたことを明らかにいただいていくということは、必ずしも容易ではないということです。曾我先生がおっしゃった、一句一句が南無阿弥陀仏の念仏であります。どんなに難しい言葉であろうとも、難しい意味内容を含んでおろうとも、聞いていくことができるという。そういう智慧が開かれるということをお私は思うのであります。

文字も読めない、漢字も書けないような多くの庶民の方が「正信偈」をいただいて、念仏を申して、「正信偈」と共に、生活してこられたという歴史があります。それがまさに人間の知的理解というものを超えて、身読するという。また、身に受けるという。こういう伝承のあることを、私は絶対に忘れてはならないと思えます。

例えば農作業をしておられる方が、汗みずくになって、田植えしたり稲刈りしたり、そういうふうな労働の中で、念仏を申され、「正信偈」の言葉を思い起こされて、そこに生きる力を受けていかれた。家庭でのお内仏の前でも、お勤めによってどれ程、生きる力を見出していかれたか。もう一つ言えば、先立っていかれた方々のご苦勞というものを身に受けて、それによって今の私たちの生活があるのだという。本当の意味の豊かさですね。自己中心、自己本位ではなくてですね。信が、人間を支えている、養育していると。養い育てている。そういう地盤ですね。その発見、それをいただく。

だからそこにどうでしょうか。人間の生活としては本当の豊さがあると。深さがあり、豊かさがある。現代のように文明が進んで本当にもう想像を絶するような恵さ、御教えというものを獲得しているのですが、だからといって豊かであるかということ、そうは言えません。苦悩を抱えて、彷徨っている人たちが沢山おられますよ。自殺をなさる方が何万といらっしゃる。死にたいと思っている方は何十万といらっしゃるということだと思っております。それがやはり生き方自身に問題がある。社会に問題があることは勿論、社会の中で生きていく一人ひとりに問題があるということをお教えられますね。

この前の時にはですね、「光闡横超大誓願」という、「依修多羅頭真実 光闡横超大誓願」というところを学んだのであります。少し見逃しておる言葉がありましてですね、今日は初めに補足として、光闡横超という、横さまに超えるということをお話したいと思えます。

これは『大無量寿経』に説かれてある言葉でありまして、

必得超絶去 往生安楽国

必ず超絶して去ることを得て、安養国に往生せよ。

横截五悪趣 悪趣自然閉

横に五悪趣を截りて、悪趣自然に閉じん。

(真宗聖典 五七頁)

超というのは超えるということですね。何を超えるかということ、迷いの在り方、迷いの生活を絶って、超え絶って、そしてそこに留まらない。安養国というのは浄土の世界、仏様の世界、安養国に往生する。本願の念仏に遇って、真実信心を一心に目覚めるということは、必ず超絶して去ることを得て安養国に往生するという道が開かれる。そして、横に五悪趣を截するという。横は他力を表すわけですね。本願力。悪趣というのは人間を悩ませてやまない地獄、餓鬼、畜生、人、天。まあ修羅を含めれば六道。六悪趣になるわけですが。それから解放されるということなのです。

その言葉について親鸞聖人が非常に丁寧な注釈をしておられまして。そのことを紹介させていただきたいと思います。聖典をお持ちの方は、『尊号真像銘文』。五一四頁の七行目ですね。

「横截五悪趣 悪趣自然閉」というのは、横は、よこさまという。よこさまというは、如来の願力を信ずるゆえに行者のはからいにあらず。

人間の思い計らい、計画、そういうものではないと。

五悪趣を自然にたちすて、四生はなるるを横という。他力ともうすなり。これを横超というなり。

四生というのは、胎卵湿化という、迷いの在り方ですね。

横は豎に対することばなり。

豎というのは自力を表す言葉ですね。

超は迂に対することばなり。

迂というのはようやく、ようよう、遅くに、段々にということです。超は一氣にと。

豎はたたざま、迂はめぐるとなり。豎と迂とは自力聖道のこころなり。横超はすなわち他力真宗の本意なり。截というは、きるという。五悪趣のきずなをよこさまにきるなり。「悪趣自然閉」というは、願力に帰命すれば、五道生死をとずるゆえに自然閉という。閉はとずというなり。本願の業因にひかれて、自然にうまるるなり。

単なる注釈ではありません。仏陀釈尊のお心を、そのまま表現してくださった。そういう大事な言葉でありまして、私たちの人生にそういう道が開かれるということを表されております。そのことを踏まえてですね、今日の

広く本願力の回向に由って、群生を度せんがために、一心を彰す

(真宗聖典 二〇六頁)

これも非常に内容の深い一句であります。広くということもですね、際限なく広く深いということでもあります。これは廣大狹小ということと対比すれば、より明らかになるのであります。広くというのは仏の本願力に由るということですね。何故、広く本願力の回向に由るということが出てきたか。出てこなければならなかったか。必然性があります。自然の道理だからです。それは狭小なる人間自力の計らいの苦悩なのです。

具体的なことを申しますと、太平洋戦争。日本では大東亜戦争といったわけですがけれども。その時代、私は敗戦のときに小学校四年生になりまして、学校で教えられた、大日本帝国なのですね。世界に冠たる国であると。神国、神様の国、日本であると。こういうことを教育の場で教えられたのです。日本人が世界の人類の中では一番優れている人間であると。そういうことをいってですね、戦争をしてですね、外人を毛唐というような言葉で。中国の人をちゃんころって日常でね。もうこれは全く人間の営みが、日本国の営みがアジアの恩恵を受け、世界の繋がり、恩恵の中にあるという事実を無視してですね、狭く小さな閉鎖世界に閉じ籠っているという。これはまことに悲しい事実でありまして、何百万という人たちがいのちを奪われていったのです。私の一番上の兄もその一人でありますし、二番目の兄も病気になって、養生もできなかったということがあるわけです。

本当に広く深い教えに遇っておるか。狭く小さな生き方によるかということ、人間のいのちに関わる根本問題だと。そのことを私は決して忘れてはならないと思うのです。悲しいかな、日本の国においては、天皇絶対主義の恐れを奉ったということがあるのでしようが。人間が権力を握るとどんな恐ろしいことをするかわからない。これはドイツでも同じですね。ユダヤ人を沢山虐殺したということがありますけれども、これもつい最近のことですよ。だから人間というのは本当に迷いの深い。脆弱な危ない存在であると言わなければならない。そういう人々の上に広く本願力の回向に由ってということが開かれて、初めて見出されてくるというそういう大いなる意味があるということ、私は忘れてはならないと思いますね。

本願力回向ということにつきましては、『願生偈』の初めには、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」という一心願生ということ、『無量寿経』のこころを表されたと思うのですが。偈のこころを表された散文では、五念門を説いておられるわけですね。五念門は、礼拝、讃嘆、作願、観察、回向。門ということはあらゆる人々に開かれておる。

「礼拝」というのは阿弥陀仏を礼拝する。「讃嘆」というのは阿弥陀仏の障りのないはたらきを讃嘆する。「作願」というのは浄土に生まれようと願うという。「観察」というのは浄土の世界、人々、浄土のはたらきですね。阿弥陀仏、人々、浄土、そのはたらきを観察する。「回向」というのはそういうはたらきをいただいて、共に浄土に生まれようと願う。回向というのは振り向け、回らして振り向けるといふ。天親菩薩の五念門では衆生、善男子善女人の五念門行と。浄土に生まれる行として説かれていたのであります。それが展開する中で菩薩の行になると。親鸞聖人は、この五念門を如来の行と。如来のはたらきを私たちの上に回向されたのである。これはもうその通りなのです。

例えば礼拝するということも、自分で礼拝すると。初めはそういうこともあるかもしれませんがけれども、それは自分で礼拝するというのは浅いのであって、礼拝せずにはおれない、そういう尊い人、はたらきに遇うということになると、それは自然であって、自分の自力のはからいにあらずという。その究極的なはたらきは、回向ということであって、人間のよきところ、よきはたらき、功德善根を回向して、仏や衆生に差し向けて、往生することを願う。浄土に生まれたいということ

の浄土自身のはたらきから、私たちの上に与えられるのであると。これはもう大変なことです。往生浄土の道ということが、親鸞聖人は往相回向、浄土へ生まれゆく道。浄土に生まれた人のはたらきが、この娑婆の世界にはたらい、共に仏道へ向かわしめるという還相回向。往相還相、共に如来の回向である。そういうことが明らかにするのでありますが、大変な人間の生きる根本課題に応じて生きる。一心に目覚めて生きる。

そしてそれが具体的な念仏する生活。開けば五念門。これ、礼拝ということもね、厳しいのですよ。あなたは何を礼拝していますかと。金貨ではありませんかと。地位ではありませんかと。学歴ではありませんかと。田舎の生活で、例えば年頃になったお見合いするとき略歴とかいろんなことをね、学校はどこであるとかね、財産事情がどうであるかということをお互いに交わしてやるでしょう。信心があるかないかではないのですよ。人間それ自身においてではなくて、条件的なことで決めようとするわけですよ。人間は本当に智慧がないから、そういうことを助けにすることがあるかもわかりません。

何を礼拝しているかと。拝んでいるかと。金とか地位とか名誉とか。そういうものを有難い有難いといって拝んでいるのではないかと。それは阿弥陀という無限無量なるいのちの尊い世界に目覚めると。それを礼拝するという事は、わからなければ、やっぱり世俗のね、人間を縛り、墮落させるような、そういうものを拝まずにはいられないと。だから申し上げたいことは、あくまでも現実の苦悩の深い、迷いの深い、本当に真実の教えに暗い人間生活の中に、一心五念の道が開かれておるということを私たちは忘れてはならないと思いますね。

回向ということについて、この天親菩薩は、

一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願す、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるがゆえに。
(真宗聖典 一三九頁)

大悲心ということ、人間が人々の小慈小悲、中慈中悲ということを超えて、本当に目覚めるといふ。仏になる身となるということが自ずから定まる。大悲なのですね。助かりようのない人間の上に、目覚めていける道を開く。これが大悲である。

それとまた大悲ということで忘れてはならないのが、弥陀同体の大悲という。同体というのはその人自身の中に、上にはたらいしている。それは人間生活の事実から考えると、考えるとというか、味わうと、そういうことだと思ふのです。苦しみ、悲しみ、悩んでおるこの私と一体となって、如来様は悩んで苦しんでおられるという。そういうですね、同体。どこか高いところから網を下げて救い上げるようなそういう救い方ではなくてね、その人と一体になって。

そういうことを端的に表現した言葉が、「法蔵菩薩は阿頼耶識である」という。これは曾我量深先生がおっしゃったわけでありませうけれども。阿頼耶識というのは人間の深層の、一番深いところではたらいおる意識であると。如来が私自身となって、私を目覚ましめるといふ。

曾我先生の言葉の中に有名な、「如来我となりて我を救いたもう」といふ。これはですね、娑婆と浄土といったときに、浄土を遠い世界に見るようなそういう人間的な考え方を根本から破ると。娑婆と浄土はあくまでも本質は次元が違います。娑婆は現実世界、浄土は絶対無限の世界。それが分断されたものかということ、浄土のはたらきは無限であるがゆえに有限のこの身の上に与えられるという。浄土のはたらきそれ自身に触れ、明らかにすると、無限無量であるがゆえに、有限なる私たちの上にはたらく。曾我先生の真実の教えをいただいてもね、親鸞聖人の教えをいただいても、「如来我となりて我を救いたもう」と。本当に現実存在の人間の上に浄土の教えをですね、明らかにした法蔵菩薩が、『大無量寿経』の中には物語として展開しています。はたらくのはどこか。私

の中に法蔵菩薩が誕生するのであると。私はこの曾我先生の言葉の真理性は、疑い得ないと思います。私たちの中に道を求めるようなところが聴聞したいというようなところが起こってくるのは、私の中の私の良心というふうなちっぽけなものではなくしてね、あらゆる人々の上に、はたらいて促してやまないそういう精神である。ここらである。それが法蔵魂とか法蔵精神とか言われる。法蔵魂とか法蔵精神。

今の回向という言葉で天親菩薩が

一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願す、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるがゆえに。
(真宗聖典 一三九頁)

それはどういう世界がそこから開かれるかということ、出の第五門、五念門、五功德門ということでは言われておるのでありますが、五念門によってそれぞれの開かれる世界がある。礼拝門によっては近門という。浄土の世界が開かれてくる。讃嘆門においては、浄土に生まれる人々の集いの中に、集まりの中に讃嘆する。作願門においては、宅門。その家の中に。これは例の言葉で言われておりますから、私たちに具体的に感ずるような。観察門において屋門という。浄土という世界の中に生まれていくと。そして回向門は、園林遊戯地門という。園林遊戯地門というのは、生死の園、煩惱の林に遊戯するという。これは娑婆世界ですね。私たちの人間世界ですね。そこに遊戯する。遊戯というのは遊ぶが如くにはたらくという。本当に自在にですね、無碍にはたらく。自由自在に無碍にはたらく。これが回向門のはたらき。

何々せんがためにという、そういうためにという意識がですね、いわゆる自力作善的な意識を超えておるといふ。群生を度せんがためにという、そういうためにというのはですね、自力作善のためではありません。如来のはたらきそのものですね。もうそこに広大な世界があるわけです。広く本願力の回向に由って、本願力のはたらきによって、人間の自力の回向ではありません。如来の本願それ自身のはたらきによってですね、群生を度せんが為に一心を彰す。群生ということ、衆生ということですね。一切の苦悩を抱いて、迷い抱いておる、そういう一切の群生。生死の迷いから目覚めの世界。目覚めの生活に渡す。この一心は世尊我一心という一心ですね。

現代語訳では、

み仏の本願の力を広く人々の上に表して、生き悩む人々を救い遂げるため、本願に領(うなず)く一心をあきらかにされました。

本願に領くというのは、生き悩む人々自身が如来のところに領くかと。そこに一心ということがある。如来のはたらきであって、そのはたらきは、如来のはたらきであるがゆえに、苦悩する衆生の上にはたらくという。この一心ということですね、天親菩薩の『浄土論』の一番初め、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」という言葉から来ている。『浄土論』は大変大切な經典です。『真宗聖典』をお持ちの方は、一三五頁ですね。

世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国

世尊我一心に、尽十方無碍光如来に帰命して、安楽国に生まれんと願ず。

これは天親菩薩自身が、自分自身の全存在を挙げて釈尊の前に座られて、釈尊に申し上げる。我一心に尽十方無碍光如来に帰命して、安楽国に生まれんと願ずという。天親菩薩自身ですね、根本

的な姿勢、態度ですね。この天親菩薩が一心にですね、世尊の名を呼ぶ。世尊の名を呼んでっていうことは、仏陀釈尊の教えをいただいて、その教えを受けるという表明ですね。それを表しているのでありまして、この一心っていうのは、如来の真実に触れた一心であります。親鸞聖人はこれを丁寧に注釈しておられまして、『真宗聖典』をお持ちの方はですね、一六八頁ですね。『教行信証』の行巻の中にこの天親菩薩の『浄土論』を注釈された曇鸞大師の言葉を引かれておりまして、『浄土論註』の言葉ですね。

「我一心」は、天親菩薩の自督の詞なり。言うところは、無碍光如来を念じて安楽に生まれんと願ず。心心相續して他想間雜なし。
(真宗聖典 一六八頁)

曇鸞大師が天親菩薩の『願生偈』の世尊我一心という言葉について、こういう了見を述べておられる。自督の詞である。自督の督という字、いいですね。親鸞聖人は、注を付けておられまして、自督というのは、自らの了解、自らの信心、自らの至徳、天親菩薩ご自身が自らの了解、信心を表白して述べたと。それに督という字はですね、明らかなりという。そして、勸、率、正というふうに。

督——底本上欄注「督〔アキラカナリ〕字 勸也 率也 正也

(真宗聖典 一〇三二頁)

こういう勸、率、正であるという注をね、親鸞聖人が欄外に残しております。至徳というのは天親菩薩ご自身の了解、心理なのですが。勸というのは勧める。率というのは率いる。正というのは正すという。これは一心のはたらきの中に本当に勧めてくださるそういう勧めに応じて、本当に率いてくださる。そういうものに応じて本当に正してくださる。この正すという言葉は、倫理的な正ではなくて、人間の存在の生き方それ自身を正すような。

これね、例えて言えば、生きがいを失うということがあるわけですよ、人間には。自暴自棄になってしまうことが悲しいかな、そういうことが起こりますね。どうでしょう。ご自身の人生の中で空しいなとか、生きがいを失うとか、迷うとかそういうことは全くありませんか。生きがい、悩む。虚しさを感じるといふ時間はないというわけにはいかない。ないと言えは嘘になるということが人間の現実だと思うのです。私は決して綺麗事で話したくはない。綺麗事で聞きたくない。生身の人間の問題として、教えをいただくという。そこに本当に罪を聞きただすということは、人間生活の中でなくてはならないはたらきです。生きがいを失ったものに本当の生きがいを見出すという。喜びを失ったものに本当の喜びを見出すと。こういう親鸞聖人の勸、率、正というふうな注はですね、大変大事な注だと思いますね。

自ら勧め、率い、正していくようなはたらき。明らかなのはたらき。それが世尊我一心の一心ということですね。真実の信心ということですね。親鸞聖人はこの一心について、信巻の別序では「一心の華文」ということで。華というのはつぼみが開いて華になる。それは私たち人間の中に一心として開かれる。いただける。そういう意味が込められていると思いますね。

広く三経の、浄土三部経の教えの光をいただいて、ことに一心の華文を開くという言葉で信心を表す中で、別序の中で言われてあります。そういう一心としてですね、私たちの上に、回向され、その一心をいただいて生きていくことができると、そういう道がですね、苦悩の衆生の上に開かれているということ、教えられるのであります。

飛躍的な言い方になるかもわかりませんが、曾我量深先生のお言葉として、これは昭和四十一年の七月二日、富山の月愛苑という、佐伯静さんという方が主催しておられた会に来ておられた女性

の同行の方に申された言葉なのですけれども、

如来に信ぜられ
如来に敬せられ
如来に愛せられ
かくて我等は
如来を信ずるを得る

と。これはもう説明なくしてね、響くような。有名な。ただ有名ということではなくてですね、本質と申しますか、生きた姿をね、本当に短い言葉ではっきりと言ってくくださった。私は大変尊い言葉だと思うのです。敬は敬うですね。如来を信ずるということ自身が、如来が私たちに対して信じ、敬し、愛するというはたらきの上に成り立っているのであるということ、仰せられておられました。

こういう言葉に触れますとですね、私たちの人生というのは本当に尊い、大変な人生をいただいておりますのだと。命あり、これ不可思議の事実なりということがですね、

如来に信ぜられ
如来に敬せられ
如来に愛せられ
かくて我等は
如来を信ずることを得る

そういう人間が本当に大地に立ち、仏願に立って、生きることができる。生死を尽くしていくことができる。そういう道が教えられているのだなということ、身を知らされるのであります。だいぶ時間が長くなりましたが、話のほうはこれで終わらせていただきまして、後は座談のほうでよろしくお願いたします。どうもありがとうございました。